



# 筑紫女学園大学リポジト

## A Note on Jaināgama

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇野, 智行, UNO, Tomoyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/200">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/200</a>

# ジャイナアーガマ覚え書 ～聖典と知の関連～

宇野智行

## A Note on *Jaināgama*

Tomoyuki UNO

### 0. 序

仏教経典には、「私はこのように聞いた」（如是我聞：evaṃ mayā śrutam）という文言が冒頭に挿入されており、仏弟子たちが仏陀の教説を聞き、その記憶を纏めたものが経典であると容易に理解できるであろう。このような記憶を纏める作業、つまり仏典結集が複数回に渡り、数百年もの歳月を経て現存聖典が成立していることも確かであるが、少なくとも「聖典」と呼ばれるものは仏陀その人の説法を元にしていないことは間違いない。つまり、仏陀の説法の記録こそが聖典として我々に残されているのである。このような構造は仏教だけに限らない。ジャイナ教においても、仏教に見られるのと同様の聖典の成り立ちを持つ。このことは、ジャイナ教聖典中に散見される次のような文言に明らかである。

長老よ！私はかの尊者から次のように説かれたことを聞いています。

suyam me āusaṃ teṇaṃ bhagavayā evam akkhāyaṃ / <sup>1</sup>

(Skt.: śrutam mayāyusman tena bhagavataivam ākhyātam)

この文言には、三人の人物が予想される。すなわち、(1)この言葉を述べる者、(2)「長老よ！」と呼びかけられる者、(3)「尊者」とされる者、の三者である。一般に、(1)は「ガナダラ」(ganadhara: 教団を保持する者、教団長) と呼ばれるマハーヴィーラの直弟子とされる者、(2)はそのガナダラの弟子、(3)はマハーヴィーラと解釈される<sup>2</sup>。つまり開祖から直接説法を聞いたガナダラが、自分の弟子にその説法の内容を語るという形をとり、この基本構造の元に聖典が作成されているのである。

仏教における聖典が「阿含」(āgama)と呼ばれているのと同じように、ジャイナ教においても聖典は「アーガマ」(āgama)と呼ばれ、白衣派では45部のアーガマを数える。アーガマは長い年月をかけて成立しており、全ての内容がマハーヴィーラの説法そのものとは言えない。しかしながら、アーガマが開祖の教えを基礎とし、教えを現代にまで伝えるものであることは間違いない。本稿は、このような「アーガマ」の成りたち・構造を‘āgama’という語が指し示す内容を考察することによって概観したい<sup>3</sup>。特に聖典が作られる経緯と目的を、聖典および聖典注釈文献を題材にして紹介し、知の源泉および知の継承としての聖典観を明らかにすることを目的とする。

## 1. 『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』でのアーガマの分類

まず、ジャイナ聖典そのものに見られるアーガマの分類に着目し、聖典の成り立ちを考察してみよう。『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』(Anuyogadvārasūtra: 以下『アヌヨーガ』)には、複数のアーガマの分類が見られるが、これらの分類には、ジャイナ教の聖典観が如実に表われている。まず、『アヌヨーガ』において‘āgama’という語は、四種のプラマーナのうちのひとつとして登場する。すなわち‘āgama’は、知覚(paccakkha: \*pratyakṣa)、推理(aṇumāna: \*anumāna)、類推(ovamma: \*aupamya)と共に列挙されるプラマーナであり、ジーヴァが持つ知という属性(nāṇaḡuṇa: \*jñānaḡuṇa)であると説かれている<sup>4</sup>。したがって、『アヌヨーガ』では、‘āgama’という語は明らかに知(jñāna)という意味で使用されていることが前提であると考えねばならない。このようなアーガマは、まず二種に分類される。

では、アーガマ(āgama)とは一体何なのか。アーガマには二種あると定められている。それは世間的なものと同世間的なものである<sup>5</sup>。

そして、『アヌヨーガ』では、これらの二区分の例として次のようなものを挙げている<sup>6</sup>。

世間的なもの: 『[マハー]バーラタ』(bhārahaṃ)、『ラーマーヤナ』(rāmāyaṇaṃ)、『四ヴェーダ』(cattāri vedā)

超世間的なもの: 『アーチャーラ [アング]』(āyāro)、『ドリシュティヴァーダ』(ditṭhivāo)

この例を見れば分かるように、‘āgama’という語は「書物」を指している。上記の例では、無知で誤ったものの見方をしている者(ジャイナ教以外の者)が世間的なアーガマを造り、一切知者・一切見者である者(すなわちジャイナ教徒)が超世間的なアーガマを造るとされる。したがって、ここでは‘āgama’はジャイナ教聖典およびジャイナ教以外の聖典も含み持つ、「書物」一般を指示し得ると考えられる<sup>7</sup>。

しかしながら、‘āgama’という語は単に実体として存在する書籍を意味するわけではない。『アヌヨーガ』では、上記のような他学派の作品や12アングと言った書物群は、‘āgama’という範疇だけでなく‘suya: \*śruta’の分類中にも見ることができる。‘suya’ (逐語的には「聞かれたもの」の意)はまず「名付けとしての‘suya’」(nāma-suya: \*nāma-śruta)、「表象としての‘suya’」

(*thavaṇā-s: \*sthāpanā-ś*)、「実体としての ‘suya’」(*davva-s: \*dravya-ś*)、「状態としての ‘suya’」(*bhāva-s: \*bhāva-ś*) に四分されて考察されており、上記のような「書物」と思われるものは第4の「状態としての ‘suya’」に分類されている。この四分類はニクシェーバ (*nikṣepa*) と呼ばれる聖典解釈基準であるが、ここでは特に「実体としての ‘suya’」と「状態としての ‘suya’」の対比に着目しなければならない。すなわち、「貝葉や本に書かれたもの」(*pattayapothhayalhiyam; \*patrakapustakalikhitam*) は「実体としての ‘suya’」に分類され<sup>8</sup>、12アング等は「状態としての ‘suya’」に分類されているのである。したがって、上記の他学派の聖典や12アングは、我々が物質的な実在物として手に取ることが出来る「書籍」や眼で見ることの出来る「文字」を意味するわけではない。「書籍」「写本」や「文字」などという物質的形態を取るものはもちろん「聖典」と言いうるが、12アング等は明らかに物質に対比される「知」という意味を包含しているのである。さらに、『アヌヨーガ』は次のようなアーガマの分類を提示する。

あるいは、アーガマには三種あると定められている。それは、スートラとしてのアーガマ、アルタとしてのアーガマ、そしてそれら両者としてのアーガマである。<sup>9</sup>

このアーガマの分類では、‘āgama’ が単なる「書物」のみを意味することを逸脱していることが明確に理解できる。まず ‘sutta (\*sūtra)’ という語がスートラ体で書き記された「書物」を意味することは明らかであろう。その主題をできるだけ少ない言葉から成る文章によって結び合わせた形式が「スートラ (ひも) 体」と呼ばれており、‘sūtra’ とは語の配列によって主題を一つながりのものとするを目的とする書物のことを指す。ジャイナ教のアーガマも、スートラ体ではないものを含むにせよ、これと同じように教説を一つながりのものとして纏めることを目的としている。したがって、ジャイナ教においても ‘āgama’ という語が「スートラ」と呼ばれる書物を意図していることは明らかである。

そして、上記の引用では、「書物」だけではなく ‘attha (\*artha)’ と呼ばれるものもアーガマの一要素となっている。ハリバドラはこの ‘artha’ を次のように説明している。

このうち、スートラこそがスートラとしてのアーガマである。そして、それ (スートラ) によって表示される (*tadabhidheya*) 内容が、アルタとしてのアーガマである。<sup>10</sup>

まずスートラとしてのアーガマとは、「スートラ」と呼ばれる書物に他ならない。そして、アルタとしてのアーガマとは、その「スートラ」の表示対象 (*abhidheya*) であり、短く簡潔な文章が指し示す意味内容 (*artha*) のことである。したがって、‘āgama’ とは書物 (言葉) が指示する内容のことも意味し得るのである。

続いて『アヌヨーガ』はこれら「スートラ」および「アルタ」について、別の観点から再分類を試みる。すなわち次の通りである。

あるいは、アーガマには三種あると定められている。それは、自己のアーガマ、介在物のないアー

ガマ、そして間接的なアーガマである。救世主たちにとって、[彼らの持つ] アルタは自己のアーガマ（自身から来るもの）である。ガナダラたちにとって、スートラは自己のアーガマであり、アルタは介在物のないアーガマ（介在なく来るもの）である。ガナダラの弟子たちにとっては、スートラは介在物のないアーガマであり、アルタは間接的なアーガマ（間接的に来るもの）である。同様に、その他の者（ガナダラの直弟子以降のもの）にとっては、スートラもアルタも自己のアーガマではなく、介在物のないアーガマでもなく、間接的なアーガマなのである。<sup>11</sup>

救世主（ティールタンカラ：tīthagara / tīrthānkara）たちにとって、アルタ（スートラが指し示す内容）は、自己自身で得た知の内容であるから、自己のアーガマ（attāgama: \*ātmāgama）に分類される。そして、ガナダラたちは、救世主たちの説法を直接聞き、それを彼ら自身が「スートラ」として纏め記したことから、「スートラ」が自己のアーガマとなる。しかも救世主から直接説法を受けているので、救済者が持つアルタは介在物のないアーガマ（aṇamtarāgama: \*anantarāgama）に他ならない。さらに、ガナダラの直弟子にとって、救世主の知の内容であるアルタはガナダラという介在物を介していることから、間接的なアーガマ（paramparāgama）と分類される。一方、スートラはガナダラから直接教示されるので、介在物のないアーガマと理解される。さらには、そのまた弟子というように、アルタおよびスートラは引き継がれていくが、ガナダラの直弟子以降の者たちにとっては、アルタ・スートラ共に間接的なアーガマと分類される<sup>12</sup>。

	救世主	ガナダラ	ガナダラの弟子	それ以降の弟子
アルタ (attha; artha)	自己のアーガマ attāgama	介在物のないアーガマ aṇamtarāgama	間接的なアーガマ paramparāgama	間接的なアーガマ paramparāgama
スートラ (sutta; sūtra)		自己のアーガマ attāgama	介在物のないアーガマ aṇamtarāgama	間接的なアーガマ paramparāgama

この分類は、救世主が自ら得た知の内容をガナダラに説き、それを直接聞いたガナダラがスートラに纏め、それ以降の弟子に伝わっていること自体を、‘āgama’ という語で呼んでいることを示している。つまり、‘āgama’ とはもちろんジャイナ教においては「スートラ」という書物を意味しながらも、その「スートラ」が意味する内容「アルタ」をも意味する。この「アルタ」は、救世主が自ら得た「知の内容」であり、「スートラ」はその「知の内容」を言葉によって纏めたものである。「スートラ」は、物理的には「写本」「文字」などという実体として存在するものと言えるが、状態としては「知の集成」と理解される。したがって、救世主が得た「知」、ガナダラによって纏められた「知の集成」、これらの継承が上記の分類で意図されていることになる。‘āgama’ とは「知」の継承であり<sup>13</sup>、それを継承する人それぞれが持つ「知」に他ならないのである。

## 2. 知の源泉：‘sūtra’ と ‘artha’

聖典段階において既に ‘āgama’ という語が「スートラ」と「アルタ」を意味し得ることを確認したが、両者にはどのような違いがあるのだろうか。ここでは、聖典注釈者たちの解釈に基づき、両者の相違について考察したい。

まず、『アーヴァシユヤカ・ニルユクティ』においてバドラパーフは救世主からガナダラへと  
いう知の継承について、次のように述べている。

アルハット（阿羅漢＝救世主）はアルタ〔のみ〕を語り、ガナダラたちは精妙なるスートラを造った。ゆえに、教説（sāsana）を裨益するためにスートラが生じたのである。<sup>14</sup>

この言明によれば、スートラの作者はガナダラであり、アルタを語ったのは救世主に他ならない。ジナバドラによれば、ここに言う「アルタ」とはスートラが指し示す対象（ジーヴァなど）のことである<sup>15</sup>が、当然のことながら救世主はそのような対象を語るにしても、対象を指示する「言葉」を語ったことは明白である。彼がアルタを指示する言葉を語ったのであれば、言葉で構成されているスートラとの違いは不明瞭であり、救世主がスートラ作者と看做される可能性を残す<sup>16</sup>。この救世主の言葉とスートラの関係について、註釈者ジナバドラは救世主とガナダラの役割を明確に分割している。

単なる言葉であることは同じであるにしても、アルハットは〔ガナダラという〕人間と比較して極めて少しのもの（atistoka）を語ったのであって、12アングを〔語ったのでは〕ないと言われている。そうではなくて、アルハットは12アングによる纏めのために、「生起」（utpanna）・「存続」（dhruva）・「消滅」（viagata）というただ三つの語のみを〔語ったのである〕。そして〔その三つの語のみが〕述べられただけで、残りは述べられなかったにも関わらず、種子のような知性などを持つ者（bījādibuddhi：＝ガナダラ）たちは〔その残りの意味を〕たどって理解する。そして、それ（少しのもの）は、12アングの点から言えば、「アルタ」（有益なもの）と言われるのである。<sup>17</sup>

当該箇所では、アルハット（救世主）は12アング作者ではなく「極めて少しのもの」を述べただけであることが明言されている。すなわち「極めて少しのもの」と「12アング」という対比により、救世主とガナダラの役割の相違が示されていると言ってよい。ここに言う「極めて少しのもの」（aitstoka）とは、救世主が説いた簡潔な原理そのものと言える。ハリバドラによれば、単なる「生起」などという単語を聞くだけで、弟子であるガナダラたちには、『タットヴァ経』に纏められているような「存在するものは、生起・消滅・存続と結びついている」<sup>18</sup>という存在論的理解が生じる<sup>19</sup>。その結果、ガナダラたちは単にこのような簡潔な単語のみの説教を聞いて、12アングという形にこれを拡充するのである。

また、このようなガナダラたちのスートラを造るという役割には、彼らの「知性」が前提とされている。上記の「種子のような知性など」は、ガナダラたちが持つ特殊な知性であり、ジナバ

ドラはこれを次のように説明している。

一方、アルタ [を表示する] 語 [だけ] で、[そのアルタ以外の] 意味をたどって理解する者、彼は種子 (bija) のような知性を持つ者である。<sup>20</sup>

既に述べたように救世主はアルタのみを語り、それ以上のことは何も語ることはない。そしてガナダラには救世主が語るアルタを聞くだけで、それを源泉として、述べられなかった残りの真理についても理解する能力が備わっている<sup>21</sup>。このような知的能力<sup>22</sup>をもって、彼らは根本的な原理 (すなわちアルタ) をスートラという形に拡大し、より詳細に「精妙なる」(nipuna) スートラを造ったのである。

### 3. 知の継承：‘pravacana’ と ‘saṅgha’

上述のように、救世主の得た「知」の内容はアルタとして語られ、それを根源的原理としてスートラが造られる。この構造は、パドラバーフによって次のように比喩的に語られる。

量り知れない知を持つ独存者 [マハーヴィーラ] は、苦行・抑制・知という木に登って、覚りに至る可能性のある者たちを目覚めさせるために、そ [の木の上] から知という [花の] 雨を降らせた。ガナダラたちは、知性で出来た布切れによってそれらを残りなく集め、pravacanaのために、救世主が述べたことを一つながりのものにした。<sup>23</sup>

この比喩的表現では、まさしく上述した通り、救世主たるマハーヴィーラが「知という [花の] 雨」を降らし、「知性」あるガナダラたちがそれらを集成していることが示唆されている<sup>24</sup>。そして、当該韻文において注目すべきは、救世主およびガナダラたちの行為の目的が示されていることである。救世主が「知という [花の] 雨」を降らせる目的は、他者を「目覚めさせる」(vibhāna; \*vibodhana) ことである。一方、ガナダラたちが救世主の述べたことを一つながりのものにする目的について、ここでは ‘pravacana’ のためであると言う。当該韻文の ‘pravacana’ という語を、ジナパドラは次のように解釈している。

‘pravacana’ とは [賞賛に値する] 最初の言明であり、ここでは言語知 (śrutajñāna) のことである。[この言語知のために] 「それは一体どのようにして生じるのか」 [などというように、一つながりのものとするのである]。あるいは、‘pravacana’ とはサンガ (saṅgha) のことである。それ (サンガ) を裨益するために一つながりのものとするのである。<sup>25</sup>

ジナパドラによれば、‘pravacana’ には二つの解釈が認められる。まず、ここに言う第1解釈の「言語知」とは逐語的には「聞かれたもの (śruta) という知」<sup>26</sup>であり、ジャイナ教聖典やそれ以外の書物などを含むあらゆる言語的要素からなる知に他ならない。つまり、言語に関わる知は全てこの範疇に含まれ、実体としての言葉・文字・音声も、それらに基づいて人間に生じる知

も「言語知」と呼ばれうる<sup>27</sup>。そして、本稿冒頭に示したように、ガナダラが「尊者から次のように説かれたことを聞いています (suya; \*śruta)」と述べる形式を以て開始される「聖典」は、「聞かれたもの」(śruta) の筆頭に挙げられる。また、前述の『アヌヨーガ』が言うように、実体として目の前に実在する「写本」「文字」等および、そこに包含される「知」のいずれもが ‘śruta’ と呼ばれ、‘śruta’ は「アーガマ」と同一視される。ジナバドラも当該箇所<sup>28</sup>の自注にてこの ‘pravacana’ の第1解釈を「12アング」であると註釈しており<sup>28</sup>、ここに言う ‘pravacana’ は「12アングという知の集成=聖典」と理解できよう。したがって、ガナダラは「12アング(聖典)作成のために」救世主が語ったアルタを一つながりのものにしたのである。

次に第2解釈では ‘pravacana’ は「サンガ」(saṅgha) と解釈されており、ガナダラはそのサンガを益するために、スートラを作ることになる。つまり、アルタはスートラという形で継承され、そのスートラがサンガの利益となるのである。では、以上のような ‘pravacana’ 解釈から、救世主とガナダラの目的の相違はどのように理解できるであろうか。ジナバドラは、次のように言う。

[このほんの少しのものは] アングなどという [区分をもって] スートラを作成することを期待せずに [語られたので]、「アルタ」と [言われる]。あるいは、この12アングのように、[ガナダラ以降の] 残りのサンガにとって有益なものではないので、[「アルタ」と言われる。]<sup>29</sup>

救世主がアルタを語る場合、彼がそれをアングやウパーンガなどに区分して詳細にスートラを作成することを期待しているということはない。そのようなスートラ作成を担うのはガナダラに他ならず、ガナダラこそが12アング作成のために、語られたアルタを紡ぐ。また、ガナダラ以降の弟子たちにとって、救世主から直接アルタを聞くことはできないことが予想される。つまり、時間的な限界により、アルタについてはガナダラという介在が挟まれる。さらには、ガナダラには特殊な知的能力が備わっており、アルタを語る「極めて少しのもの」を聞くだけで、残りの意味をも追従することができる。この能力は、ガナダラにおいて極まっているものであり、それ以降の者が「少しのもの」によって同じ理解を得ることはできない。したがって、ガナダラ以降のサンガでは、ガナダラによって作成されたスートラこそが有益なものであり、アルタはそうではないのである。<sup>30</sup>

以上の考察は、次のように纏められよう。

救世主： アルタを語る (目的：他者を目覚めさせるため)

ガナダラ： スートラを造る (目的：後のサンガを益するため)

このような救世主とガナダラの役割分担は、「救世主(アルタ) → ガナダラ(スートラ)」という形で知が継承されていることを示しているが、最後に ‘pravacana’ をサンガと理解する意味について付言しておきたい。ジナバドラは、『ジータカルパ・パーシャ』においても、次のように説いている。

‘pravacana’ とは12アングと『サーマーイカ』をはじめとし『ビンドゥサーラ』まで [の聖典]



のことである。あるいは、知が確立している場に他ならない4種のサンガのことである。

ここでも、‘pravacana’は「聖典」および「サンガ」を意味していることは明らかであるが、そのサンガが「知が確立している場」(jattheva paiṭṭhiyaṃ nāṇaṃ; \*yatraiva pratiṣṭhitaṃ jñānam)と解釈されていることに注目したい。つまり、サンガとは「知が保持されている場」と理解されており、そのようなサンガも‘pravacana’という語に包含されるのである<sup>31</sup>。

救世主はアルタのみを語り、ガナダラはそれをスートラに纏め拡充する。そして後のサンガはそのスートラを通じて、知を保持していく。すなわち、救世主が自ら得た「知」の内容(アルタ)は、ほんの少しの単語だけによって語られる。そして、ガナダラは自らの知性によってそれを詳細なスートラにする。ガナダラ以降の弟子たちは、そのスートラを頼りとして、「知」を継承していくのである。

#### 4. まとめ

以上の考察により、以下のことが明らかとなった。

- ・アーガマは実体として存在する「書籍」のみを意味するのではなく、その「意味内容(アルタ)」をも意味する。
- ・アーガマとは、救世主を源泉とする「知」の継承行為である。
- ・救世主はアルタを極めて簡潔な単語によって語り、ガナダラはそれをスートラに纏めて拡充する。
- ・救世主の説くアルタは余りに簡潔なため、後のサンガにとってはスートラこそが頼りとなる。
- ・救世主の得た「知」は、ガナダラによって「知の集成」となり、サンガに保持されていく。

#### 【略号および参考文献】

ADS: *Anuyogadvārasūtra*: Muni Jambuvijaya (ed.), *Anuyogadvārasūtram*. 2Vols., Jaina Āgama Series No. 18 (1,2), Bombay: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 1999, 2000.

ADHV: *Anuyogadvārasūtravṛtti* (Haribhadra Sūri): See ADS.

ĀN: *Āvaśyakaniryukti* (Bhadrabāhu): Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmad-Āvaśyakasūtram*. 4Vols., Āgamodaya Samiti Series nos. 1-4, Mehesana, 1916-17.

ĀNHV: *Āvaśyakaniryuktivṛtti* (Haribhadra): See ĀN.

- AuSV: *Aupapātikasūtravṛtti* (Abhayadeva): Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmad Aupapātikasūtram*. Āgamodaya Samiti Series No.7, Mehesana, 1916.
- BKBh: *Bṛhatkalpabhāṣya* (Saṅghadāsa Gaṇi): (a) Muni Caturvijaya & Muni Puṇyavijaya (eds.), *Bṛhatkalpasūtram*. 6 Vols., Ātmānanda Jaina Grantha Ratnamālā, Nos. 82, 83, 84, 87, 88, 90, Bhavnagar: Jaina Ātmānanda Sabhā, 1942 (Reprint, 2002).; (b) Willen B. Bollée (ed.), *Bhadrabāhu Bṛhatkalpaniryukti and Saṅghadāsa Bṛhatkalpabhāṣya: Romanized and Metrically Revised Version, Notes from Related Texts and a Selective Glossary*. 3 Vols., Beiträge zur Südasiensforschung Südasiens-Institut Universität Heidelberg Band 181, 1-3, Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1998.
- BKBhV: *Bṛhatkalpabhāṣyavṛtti* (Malayagiri): See BKBh.
- BhS: *Bhagavatīsūtra*: Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmad Bhagavatīsūtram*. 3Vols., Āgamodaya Samiti Series nos.12, 13, 14, Mehesana, 1918-21.
- JKBh: *Jītakalpabhāṣya* (Jinabhadra Gaṇi): Muni Puṇyavijaya (ed.), *Pūjyaśrī Jinabhadragaṇi Kṣamāśramanaviracitaṃ Jītakalpasūtram: Svopajñabhāṣyeṇa Bhūṣitam*. Ahmedabad: Bhāīśrī Babalacaṃdra Keśavalāl Modī, Vikrama Saṃvat 1994.
- NS: *Nandīsūtra* (Devavācaka): Muni Puṇyavijaya, Dalsukh Malvania, Amṛtlāl Mohanlāl Bhojak (eds.), *Nandīsuttam and Aṇuogaddārāim*. Jaina Āgama Series no.1, Bombay: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 1968.
- NSMV: *Nandīsūtravṛtti* (Malayagiri). *Śrīman-Malayagiryācāryavihita-Vivaraṇayutam Śrīmad-Devavācakaḡaṇi-dṛbdham Śrīman-Nandīsūtram*. Śrī Āgamodayasamiti Series #16, Surat: Āgamodayasamiti, 1917.
- Puṇyavijaya, M., Malvania, D. and Bhojak, A. M.  
1968 "Introduction." In *Nandīsuttam and Aṇuogaddārāim*. See NS.
- Shastri, Indra Candra  
1990 *Jaina Epistemology*. Varanasi: P. V. Research Institute.
- SthA: *Sthānāṅga*: Muni Jambūvijaya (ed.), *Śrī Sthānāṅgasūtram*. 3 Vols., Jaina Āgama Series No. 19 (1, 2, 3), Mumbai: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 2002-2003.
- SthAV: *Sthānāṅgavṛtti* (Abhayadeva): See SthA.
- TAS: *Tattvārthasūtra* (Umāsvāti): Hiralal Rasikdas Kapadia (ed.), *Tattvārthādhigamasūtra, Part I*. Devacandra Lālbhai Jainapustakodhāra Fund Series no.67, Bombay, 1926.
- TASṬ: *Tattvārthasūtraṭīkā* (Haribhadra Sūri): *Śrīmad-Bhagavad-Umāsvātivācāvaryasamḡṛbdha-Svopajñabhāṣya-Bhagavad-Haribhadrasūrīśvaraviracita-Ṭīkayā Samalamḡṛtam Śrī Tattvārthasūtram*. Ratlam: Ṛṣabhadevjī Keśarīmaljī Jaina Śvetāmbara Saṃsthā, 1936.
- VĀBh: *Vīṣeṣāvāśyakabhāṣya* (Jinabhadra Gaṇi): Dalsukh Malvania (ed.), *Ācārya Jinabhadra's Vīṣeṣāvāśyakabhāṣya with Auto-commentary*. 3Vols., L. D. Series, nos. 10, 14, 21, Ahmedabad, 1966-68.

VĀBhBV: *Viśeṣāvaśyakabhāṣyabr̥hadvṛtti* (Maladhāri Hemacandra): *Śrījinabhadragāṇikṣamāśramaṇapā daviracitam Viśeṣāvaśyakabhāṣyam / Maladhāriśrīhemacandrasūriviracitayā śiṣyahitānāmnīyā Br̥hadvṛtīyā vibhūṣitam*. Śrī Yaśovijaya Jaina Granthamālā, nos. 25, 27, 28, 31, 33, 35, 37, 39, Benares, 1911-15. (Reprint. Bhuvanabhānu Sūri, ed. *Viśeṣāvaśyakabhāṣya*. 2Vols. Mumbai: Divya Darśan Trust, 1982.)

VĀBhSV: *Viśeṣāvaśyakabhāṣyavopajñāvṛtti* (Jinabhadra Gaṇi): See VĀBh.

\* 本稿は、平成22年度科学研究費補助金・基盤研修（C）による研究成果の一部である。連携研究者である佐藤宏宗博士（東方研究会・研究員）、研究協力者である藤永伸博士（都城高専・教授）、小林久泰博士（本学人間文化研究所・客員研究員）からは、数々の助言を頂いた。ここに記して謝意を表したい。

<sup>1</sup> 例えば、*Ācārāṅga* I.1.1, *Sūtrakṛtāṅga* II.1.1, *Sthānāṅga* I.1, *Samavāyāṅga* I.1, *Daśavaikālikā* IV.1などを参照せよ。

<sup>2</sup> 例えばアバヤデーヴァの説明によれば、第5番目のガナダラであるスダルマンが自分の弟子であるジャンプーにマハーヴィーラによって説かれたことを語ると解釈される。See SthAV on I.1: *iha kila sudharmmasvāmī pañcamo gaṇadharadevo jambūnāmānaṃ svaśiṣyaṃ prati pratipādayāñ cakāra / ---- jino mahāvīras tena bhagavatā ---- /*.

<sup>3</sup> 本稿は、Puṇyavijaya, et al.[1968]の考察に概ね従うものであり、Puṇyavijayaらの論考を一次文献に基づいて確認し、さらに知の継承という点について敷衍することをその主たる目的とする。

<sup>4</sup> 『アヌヨーガ』では、「ブラマーナ」という語の解釈の中に「知」を含み持たせる工夫がなされている。つまり、「ブラマーナ」を‘dāvappamāṇa’、‘khattappamāṇa’、‘kālappamāṇa’、‘bhāvappamāṇa’の四つに分類し、そのうちの‘bhāva-p’を‘guṇa-p’、‘naya-p’、‘saṃkha-p’の三種に分類する。さらに、‘guṇappamāṇa’を「ジーヴァの属性としてのブラマーナ」(jīvagūṇa-p) と「アジーヴァの属性としてのブラマーナ」(ajīvagūṇa-p) に二分し、前者を「知という属性としてのブラマーナ」(ñāṇagūṇa-p)、「見という属性としてのブラマーナ」(damaṇagūṇa-p)、「行という属性としてのブラマーナ」(caritagūṇa-p) の三種に分類する。この三種のうち、「知という属性としてのブラマーナ」(ñāṇagūṇappamāṇa: \*jñāṇagūṇapramāṇa) の中に、知覚以下四種（知覚、推理、類推、アーガマ）を含み持たせるのである。したがって、ここに言う知覚やアーガマなどは、ジーヴァが持つ「知という属性」であると考えられており、単なる知をもたらす手段のみを意味しない。See ADS 313, 427, 428, 435, 436.

<sup>5</sup> See ADS 467: *se kiṃ taṃ āgame, āgame duvihe paṇṇatte / taṃjahā loie ya loguttarie ya /*.

<sup>6</sup> Cf. ADS 468-9: *se kiṃ taṃ loie, loie jaṇ ṇaṃ imaṃ aṇṇāṇiehiṃ micchādītṭhīehiṃ sacchaṃdabuddhimativigappiyam / taṃ jahā ---- bhārahaṃ rāmāyaṇaṃ jāva cattāri ya vedā saṃgovamgā / se taṃ loie āgame //; se kiṃ taṃ loguttarie, loguttarie ---- jaṃ imaṃ arahamṭhehiṃ bhagavamṭhehiṃ uppaṇṇaṇāṇadamaṇadharehiṃ tīyapaccuppaṇṇamaṇāgayajāṇaehiṃ telokkacahiyamahiyapūiehiṃ savvaṇṇūhiṃ*

savvadarisīhim paṇīyaṃ duvālasaṃgaṃ gaṇipīḍagaṃ / taṃ jahā ---- āyāro jāva ditthivāo / se taṃ loguttarie āgame //.

<sup>7</sup> 『アヌヨーガ』では、śrutajñānaの区分においても、数々の書物の名称を列挙しており、その作者についても当該箇所とはほぼ同様の説明を加えている。See ADS 49-50. このśrutajñāna分類の箇所では、当該箇所に加えて仏教 (buddhavayaṇa: \*buddhavacana) やサーンキヤ学派 (kāvila: \*kāpila, saṭṭhitamta: \*śaṣṭitantra, māḍhara: \*māṭhara)、ヴァイシェーシカ (kaṇagasattarī: \*kaṇakasaptati, vaisesiya: \*vaiśeṣika)、ローカーヤタ (loyāyaya: \*lokāyata)、プラーナ (purāna)、文法 (vāgarāna: \*vyākaraṇa) などの名称が見られ、またジャイナ教の聖典としては12アングが全て列挙されている。なお、このような分類は『ナンディー・ストラ』にも見られる。Cf. NS 71ff., Puṇyavijaya, et al.[1968: 22ff.].

<sup>8</sup> See ADS 39: se kiṃ taṃ jāṇayasārīrabhaviyasārīravatirittam davvasutam, jāṇasārīrabhavvasārīravati rittam davvasutam pattayapottthayalīhiyaṃ //; ADHV on ADS 39: iha patrakāṇi talatālyādisambandhīni, tatsaṃghātaniṣpannās tu pustakāḥ, vastranipphanṇā ity anye / iyam atra bhāvanā ---- patrakapustakalikhitaṃ api bhāvaśrutanibandhanatvād dravyaśrutam iti /.

<sup>9</sup> See ADS 470: ahavā āgame tīvihe paṇṇatte / taṃjahā suttāgame ya atthāgame ya tadubhayāgame ya /.

<sup>10</sup> See ADHV on ADS 470: tatra sūtram eva sūtrāgamaḥ, tadabhidheyaś cārtho `rthāgamaḥ /

<sup>11</sup> See ADS 470: ahavā āgame tīvihe paṇṇatte / taṃjahā attāgame aṇamtarāgame paramparāgame ya / titthagarāṇam atthassa attāgame, gaṇaharāṇam suttassa attāgame atthassa aṇamtarāgame, gaṇaharasiṣāṇam suttassa aṇamtarāgame atthassa paramparāgame, teṇa paraṃ suttassa vi atthassa vi ṇo attāgame, ṇo aṇamtarāgame, paramparāgame /.

<sup>12</sup> ハリバドラはこの構造を次のように説明する。See ADHV on 470: tatrāparanimitta ātmana evāgama ātmāgamaḥ, yathārhatām arthasyātmāgamaḥ, svayam evopalabdheḥ / gaṇadharaṇām sūtrasyātmāgamaḥ, arthasyānantarāgamaḥ, anantaram eva bhagavataḥ sakāśād arthapadāni śrutvā svayam eva sūtragranthanād iti / ---- / gaṇadharaśiṣyāṇām jambūsvāmiprabhṛtīnām sūtrasyānantarāgamaḥ gaṇadharaḥ eva śruteḥ, arthasya paramparāgamaḥ gaṇadhareṇaiva vyavadhānāt, tataḥ ūrdhvaṃ prabhavādyapekṣayā sūtrasyāpy arthasyāpi nātmāgamo nānantarāgamaḥ tallakṣaṇavirahāt, kin tu paramparāgama iti / . (「このうち、自己のアーガマとは他者を根源とすることなく、自分自身のみから来るものである。例えば、アルハットたちにとってのアルタが自身から来るように。[アルハットたちは] 自分自身で [アルタを] 認識しているからである。ガナダラたちにとっては、ストラが自身から来るもの (自己のアーガマ) であり、アルタが介在物なく来るもの (介在物のないアーガマ) である。何ら介在するものなしに、尊者の近くでアルタを説く語を聞き、自分自身でストラを編んだからである。(中略) ジャンプーをはじめとするガナダラの弟子たちにとっては、ストラが介在物なく来るもの (介在物のないアーガマ) である。まさにそのガナダラから [ストラを] 聞いているから。[彼らにとって] アルタは、間接的に来るもの (間接的なアーガマ) である。まさにそのガナダラによって [アルハットと] 分断されているから。それ以降のプラバヴァなど [という弟子たち] にとっては、ストラもアルタも、その特質を持たないので、自身から来るもの (自己のアーガマ) でも介在物なく来るもの (介在物のないアーガマ) でもなく、間接的に来るもの (間接的なアーガマ) である。』)

<sup>13</sup> ‘āgama’ という語が救世主、ガナダラ、その弟子というように継承されてやって来るものであることは、

例えば白衣派における『タットヴァ経』の註釈群に示されている。Cf. TAST on TAS 1.20: tathā āgacchaty ācāryaparamparayety āgamaḥ /.

<sup>14</sup> See ĀN 92: atthaṃ bhāsai arahā suttam gaṃthaṃti gaṇaharā niṇaṃ / sāsaṇassa hiyaṭṭhāe tao suttam pavattai // [Skt.: arthaṃ bhāṣate 'rhan sūtraṃ grathnanti gaṇadhārā nipuṇaṃ / śāsanasya hitārthaṃ tataḥ sūtraṃ pravartate //]. サンガダーサは「アルタ→ストラ」という前後関係を示すため、当該韻文を改変した類似的表現を提示している。Cf. BKBh 193: atthaṃ bhāsai arihā tam eva suttkareṃti gaṇadhārī / atthaṃ ca viṇā suttam anissiyam kerisaṃ hojjā // [Skt.: arthaṃ bhāṣate 'rhat tam eva sūtrikurvanti gaṇadhārīṇaḥ / arthaṃ ca vinā sūtraṃ anisritaṃ kīdrīsaṃ syāt //] (「アルハットはアルタを語り、教団を保持する者(ガナダラ)はまさにそ[のアルタ]をストラにした。しかし、アルタなしに、[そのアルタに] 依存しないストラがどのようにしてあり得ようか。」)

<sup>15</sup> See VĀBhSV on VĀBh 1117: nanv artho jīvādir anabhillāpyaḥ /.

<sup>16</sup> VĀBhにおいて、ジナバドラは救世主がストラ作者となってしまう可能性を想定反論として提示している。Cf. VĀBh 1118: to suttam eva bhāsati atthappaccāyagaṃ ṇa ṇāma'tthaṃ / gaṇadhārīṇo vi taṃ ciya karenti ko pativiseso 'ttha // [Skt.: tataḥ sūtraṃ eva bhāṣate 'rthapratyāyakaṃ na nāmārthaṃ / gaṇadhārīṇo 'pi tad eva kurvanti kaḥ prativiśeṣo 'tra //]. (「【問い】 それならば(アルハットが言葉を語るならば)、[アルハットは] アルタを知らしめるストラこそを語るのであって、決してアルタを語るのではない。教団を保持する者たち(ガナダラたち)もまた、他ならぬそれ(ストラ)を造っている。この場合、[アルハットとガナダラに] 何の違いがあろうか。」)

<sup>17</sup> See VĀBhSV on 1119: śabdamaṭrasāmānye 'py arhan puruṣāpekṣayā nanūktam atistokam bhāṣate, na tu dvādaśāṅgam / kin tv arhad dvādaśāṅgasamkṣepārtham utpannadhruvavigatapatrayamātram / yāvati cokte śeṣam anuktam api bījādibuddhayo 'nudhāvanti / tac ca dvādaśāṅgāpekṣayārtho 'bhidhīyate /. 当該箇所は、次のVĀBhに対する自注である。Cf. VĀBh 1119: so purisāvekkhāe thovaṃ bhaṇati ṇa tu bārasaṃgāim / attho tadavekkhāe suttam ciya gaṇadhārāṇaṃ taṃ /// [Skt.: sa puruṣāpekṣayā stokaṃ bhaṇati na tu dvādaśāṅgāni / arthas tadapekṣayā sūtraṃ eva gaṇadhārāṇāṃ tat //]. (「彼(アルハット)は[ガナダラという] 人間と比較してほんの少しのものを語ったのであり、12アングを語ったわけではない。それ(ほんの少しのもの)は、それ(12アング)の点から見て、「アルタ」(有益なもの) [と呼ばれるのであって、] ガナダラたちにとってはストラに他ならない。」)

<sup>18</sup> Cf. TAS 5.29: utpādavyayadhrauvyuyuktaṃ sat /.

<sup>19</sup> Cf. ĀNHV on 735: tatra gautamasvāminā niṣadyātrayeṇa caturddaśa pūrvāṇi grhītāni, praṇipatyā pṛcchā niṣadyocyate, bhagavāṃś cācaṣṭe ---- uppaṇne i vā vīgame i vā dhuve i vā, etā eva tisro niṣadyāḥ, āsā eva sakāśād gaṇabhṛtām “utpādavyayadhrauvyuyuktaṃ sad” iti pratītir upajāyate, anyathā sattāyogāt, tataś ca te pūrvabhavabhāvitamatayo dvādaśāṅgam uparacayanti /. (「このうちガウタマスヴァーミンは、三つの質疑によって14プールヴァ[の知]を獲得した。敬礼した後の質問を「質疑」(niṣadyā)という。そして、尊者は次のように言う。「もしくは生起」「もしくは消滅」「もしくは存続」と。まさにこれら三つが質疑である。これらのみに基づいて、ガナダラたちには「存在とは、生起・消滅・存続と結びつくものである」

という理解が生じる。そうでなければ、存在することがあり得ないからである。そして、それに基づき、前世に知識を得ている彼らは12アングを造るのである。)ここに言う ‘niṣadyā’ という語は難解である。ここでは、ハリバドラに従い「質疑、質問」(prcchā)とした。このようなガナドラの質問と救世主の簡潔な答えという構造については、Shastri [1990: 284]を参照されたい。

<sup>20</sup> See VĀBh 796: jo athapatena’ttham aṇusarati sa bīyabuddhī tu // [Skt.: yo ‘rthapadenārtham anūsarati sa bījabuddhis tu //].

<sup>21</sup> 註釈者マラダーリ・ヘーマチャンドラはこの構造を次のように説明している。Cf. VĀBhBV on 796 (VĀBhBV刊本では800) : “utpādayayadhrauvayuyuktam sat” ityādivad arthapradhānam padam arthapadam tenaikenāpi bījabhūtenādhighatena yo ‘nyam prabhūtam apy artham anūsarati sa bījabuddhir iti //。 (「アルタを主要なものとする語がアルタ [を表示する] 語である。それ一語 [だけ] でも、[それが] 種子 (根源) となるものであると理解して、[元のアルタ] とは別の拡充された意味をも「存在するものは、生起・消滅・存続と結びついている」などというように、たどって理解する、彼は種子のような知性を持つ者である。)」この「種子」(bīja) という語の意味する所は、種子を元としてそこから大木が生まれるように、あるものを種子 (根源) としてそれ以上のものを理解することが意図されている。以下のアバヤデーヴァの解釈はこのことを示している。Cf. AuSV on 15, f.28a: bījabuddhiti bījam iva vividhārthādhighamarūpamahāturuja nanād buddhir yeṣāṃ te tathā /. (‘bījabuddhi’ とは、多種のアルタの理解という大木を生ぜしめるので、種子のような知性を持つ者のことである。))

<sup>22</sup> このような知的能力については、次のマラヤギリの説明を参照されたい。Cf. NSMV, f.106b: tisro hi buddhayaḥ paramātiśayarūpāḥ pravacane pratipādyante, tad yathā ---- koṣṭhabuddhiḥ padānūsāriṇībuddhiḥ bījabuddhiś ca, tatra koṣṭha iva dhānyam yā buddhir ācāryamukhād vinirgatau tadavasthāv eva sūtrārthau dhārayati, na kim api tayoh sūtrārthayoh kālāntare ‘pi galati sā koṣṭhabuddhiḥ, yā punar ekam api sūtrapadam avadhārya śeṣam aśrutam api tadavastham eva śrutam avagāhate sā padānūsāriṇī, yā punar ekam arthapadam tathāvidham anūsṛtya śeṣam aśrutam api yathāvasthitam prabhūtam artham avagāhate sā bījabuddhiḥ, sā ca sarvottamā prakarṣaprāptā bhagavatām gaṇabhṛtām, te hi utpādādipadatrāyam avadhārya sakalam api dvādaśāṅgātmakam pravacanam abhisūtrayanti /. このマラヤギリの言明に従うならば、‘buddhi’ には3種ある。すなわち、次の通りである。

- (1) 穀倉のような知性 (koṣṭhabuddhi : 師が述べたスートラとアルタをそのまま穀倉のように保持し、それを失わないもの)
- (2) 語をたどる知性 (padānūsāriṇī : スートラの一語を確定し残りの未聞のものをも理解するもの)
- (3) 種子のような知性 (bījabuddhi : アルタを説く一語を理解し残りの未聞の拡充された意味をも理解するもの)

なお、ガナドラたちには、これらのうちの(3)の能力について最高のものが備わっている。

<sup>23</sup> See ĀN 89-90: tavaniyamanānarukkhāṃ ārūḍho kevalī amīyanāṇī / to muyai nānavuṭṭhiṃ bhaviyajānavibohatṭhāe // taṃ buddhimaṇa paḍeṇa gaṇaharā giṇhiuṃ niravasesaṃ / titthayarabhāsiyāim gaṃthamti tao pavayaṇatṭhā // [Skt.: taponiyamajñānavṛkṣam ārūḍhaḥ kevalī amitajñānī / tato muñcati jñānavṛṣṭim bhavyajanavibodhanārtham // tāṃ buddhimayena paṭeṇa gaṇadharā grhītvā niravaśeṣam / tīrthakarabhāṣitāni grathnanti tataḥ pravacanārtham //]

<sup>24</sup> Cf. VĀBh 1108: taṃ nānakusumavutṭhīm ghetūṃ bīyādibuddhayaḥ savvaṃ / gaṃthamti pavayanatṭhā mālā idha cittakusumāṇaṃ // [Skt. tāṃ jñānakusumavṛṣṭīm grhītvā bījādibuddhayaḥ sarvaṃ / grathnanti pravacanārthaṃ mālā iva citrakusumāṇāṃ //]. (「種子のような知性などを持つ [ガナダラ] たちは、その [救世主が降らせた] 知という花の雨を集めて、すべて [の救世主が述べたこと] を多彩な花々を花輪 [にする] ように、一つながりのものにした。」)

<sup>25</sup> See VĀBh 1109: pagataṃ vayanāṃ pavayaṇaṃ iha sutaṇāṇaṃ kadhaṃ tayaṃ hojja / pavayaṇaṃ adhavā saṃgho gadheṃti tadanuggahatthāe // [Skt.: pragataṃ vacanaṃ pravacanaṃ iha śrutajñānaṃ kathaṃ tad bhavet / pravacanaṃ atha vā saṅgho grathnanti tadanugrahārthaṃ //].

<sup>26</sup> ‘śrutajñāna’ という語の ‘śruta’ は、聞かれる対象である「言葉」、聞く手段、聞く要因、聞く条件である「ジーヴァの持つ業の滅尽と抑制」、聞く主体である「アートマン」を意図している。すなわち、「聞く」という行為に関わる殆どの項目が ‘śruta’ という語の対象であると考えてよい。このような広範な意味を持つ ‘śruta’ であり、かつ「知」(jñāna) であるもの (Karmadhāraya 解釈) が ‘śrutajñāna’ であると解釈される。Cf. SthAV on 464: tathā śrūyata iti śrutam śabda eva, bhāvaśrutakāraṇatvāt kāraṇe kāryopacārād iti bhāvārthaḥ, śrūyate vā anenāsmād asmin veti śrutam, tadāvaraṇakarmakṣayaopāśama ity arthaḥ, ātmaiva vā śrutopayogapariṇāmānanyatvāc chr̥ṇōtīti śrutam, śrutam ca taj jñānaṃ ca śrutajñānaṃ /. なお五知としての śrutajñāna は、matijñāna を原因として生じ、14 種に分類される。14 種の śrutajñāna については、Shastri [1990: 308ff.] を参照せよ。また、śrutajñāna と matijñāna の相違については、本号掲載の小林久泰論文を参照されたい。

<sup>27</sup> 正確には「言葉」「滅尽と抑制」「アートマン」などは当然「知」そのものではないが、言葉は知の原因であり、滅尽と抑制は知の要因であり、アートマンはある点から見れば知と別のものではないので、比喩的表現によって「言語知」と呼ばれる。Cf. VĀBh 81cd: taṃ teṇa tato tammi va suṇeti so vā sutam teṇam //; VĀBhBV on 81: śrūyata ātmanā tad iti śrutam śabdaḥ, athavā śrūyate ’nena śrutajñānāvaraṇakṣayaopāśamena, śrūyate tasmāt kṣayaopāśamāt, śrūyate tasmin kṣayaopāśame saṃtīti śrutam kṣayaopāśamaḥ / suṇeti so va tti ti śr̥ṇōtīti śrutam, asāv ātmeti vā vyutpattir ity arthaḥ / suyaṃ teṇeti yenaivaṃ vyutpattis tena kāraṇena śrutam ucyaṭa ity arthaḥ / iha ca śabdasya śrutajñānakāraṇatvāt kṣayaopāśamasya taddhetutvād ātmanaś ca kathaṃcit tadavyatirekāc upacārataḥ śrutam ca taj jñānaṃ ca śrutajñānaṃ //.

<sup>28</sup> Cf. VĀBhSV on 1109: pravacanārthaṃ iti pragataṃ praśastam ādau vacanaṃ pravacanaṃ dvādaśāṅgam, tadarthaṃ prathnanti ---- kathaṃ tad bhaved iti /. ‘pravacana’ を「12 アンガ」と解釈するのは『バガヴァティー・ストラ』に遡る。Cf. BhS 20.8.682, f.792b: pavayaṇaṃ bhamte, pavayaṇaṃ pāvayaṇī pavayaṇaṃ, goyamā, arahā tāva niyamaṃ pāvayaṇī pavayaṇaṃ puṇa duvālasaṃge gaṇipīḍage, taṃ jahā ---- āyāro jāva ditṭhivāo // . (尊者よ、‘pravacana’ とは何か。‘pravacana’ とは ‘pravacani’ なのか、‘pravacana’ なのか？ ゴーヤマよ。まずもってアルハットは必ず ‘pravacani’ である。一方、12 アンガつまりガニピタカが ‘pravacana’ である。例えば、『アーチャーラ』から『ドリシュティヴァーダ』までである。)

<sup>29</sup> See VĀBh 1120: aṅgāisuttarayaṇāṇīravekkho jeṇa teṇa so atho / adhavā ṇa sesapavayaṇahio tti jadha bārasaṃgamiṇaṃ // [Skt.: aṅgādisūtracānānīrāpekṣo yena tena so ’rthaḥ / atha vā na śeṣapravacanaḥ ity yathā

dvādaśāṅgam idam //]

<sup>30</sup> このスートラの有益性について、ジナバドラは自注で次のように述べている。Cf. VĀBhSV on 1120: na hi gaṇadhara vad utpannādīpadatrayamātropānibandhanād aśeṣadvādaśāṅgāvayavārthānusmaraṇaṃ sarveṇa śakyam yathāṅgādivibhāgataḥ, tasmāt tad eva pravacanahitaṃ yat sukhagrahaṇādiguṇaṃ gaṇadharebhyo 'nupravarttate dvādaśāṅgācārādi, tad eva hi sūtram ucyate, samastāvayavārthopānibandhanāt tadanusaraṇāc ca, tadabhidheyaś cārtha iti /. (「実に、ガナダラと同じように、「生起」などという三つの語だけに基づくことによって、アングなどの区分に従って、残りなく12アングの各部の意味を想起することは、すべての人に出来ることではない。ゆえに、ガナダラたちからもたらされた楽の獲得などの徳性を持つ12アングの『アーチャーラ』等こそが、サンガにとって有益 (pravacanahita) なのであり、まさにそれこそを「スートラ」と呼ぶのである。なぜなら、[スートラは] あらゆる各部の意味に基づいており、それに従うからである。一方、そ[のスートラ] の表示対象がアルタである。)

<sup>31</sup> なお、バドラパーフやジナバドラは 'pravacana' の下位区分としてアルタとスートラを挙げ (ĀN 129; VĀBh 1364)、さらに 'pravacana' の同義語として「渡し場」(tīrtha) を挙げている (ĀN 130)。この「渡し場」も「サンガ」と理解されており、知を保持する場と理解されている (VĀBh 1377)。このような渡し場とサンガの同一視は、『バガヴァティー・スートラ』(BhS 20.8.681, f.792b) に端を発し、聖典註釈文献においては一般的解釈として受け止められている。例えば、次のマラヤギリの言明は示唆に富む。Cf. BKBhV on BKBh 1: tīryate saṃsārasamudro 'neneti tīrtham ---- dvādaśāṅgam pravacanaṃ tadādhāraḥ saṅgho vā /. (輪廻という大海を渡る手段が「渡し場」(tīrtha) である。それは12アングという知の集成 (= 聖典: pravacana) である。もしくは、それ (聖典) を保持するサンガのことである。) このような「聖典」に関わる同義語群は、聖典註釈文献中に数多く見られるが、その一つ一つの考察については今後の課題としたい。

(うの ともゆき： 日本語・日本文学科 准教授)



